

行動や習慣が主観的幸福度に与える影響

佐々木 健 吾

1. はじめに

主観的幸福度 (Subjective Well-being, SWB) とは、生活の質、あるいは豊かさ、充実・満足に関する人々の主観的評価を意味する。この測度は、一般的には、たとえば「全体としてみて、あなたは幸せですか」という質問に対して、「非常に不幸」な場合を1、「非常に幸せ」な場合を10とした場合の離散変数の回答として得られる。これらのデータは、『世界価値観調査 (World Value Survey)』などで国際データが整備されていると同時に、日本においても内閣府が『国民生活白書』で公表している。このような「主観的な」指標に注目が集められるようになったのは、所得水準が通時的に上昇しているにもかかわらず、生活実感としての豊かさや満足がそれと同様には向上しないというデータの存在に求められる。このように、所得の増加と生活満足がかい離する現象は、イースタリン・パラドックスとして知られている (Easterlin, 1974)。

経済学は、効用 (Utility) を測定することにより、人々の満足や福祉水準を評価しようとしてきた。すなわち、客観的に把握しうる情報に基づいた厚生評価を行うアプローチが取られている。適切な仮定の下で、効用は、消費あるいは所得の増加関数として考えることができる。したがって、人々の効用を増加させるためには、所得水準と財・サービスの消費量を増加させれば良いことになる。しかしながら、冒頭に述べたように、所得水準の増加と生活満足は、必ずしもパラレルな関係を示すとは限らない。そうであるならば、人々の主観的幸福度を規定する要因には他に何があるのか。

この点について、心理学や社会学の分野では主観的幸福度研究が盛んに行われている。これらの成果は、Diener and Seligman (2004), Dolan et al. (2008), Bok (2010), 白石・白石 (2010) らによって整理されており、主観的幸福度が、社会人口学的要因やさまざまな社会・文化的要因によって影響されることが示されている¹⁾。一方で、日本における経済学の分野において、この主観的幸福についての研究がなされるようになったのはごく最近のことであり、Frey and Stutzer (2002, 2005) がその端緒を与えたとされる²⁾。日本における個票データにもとづく実証研究としては、たとえば、浦川・松浦 (2007) が、準抛集団内の所得格差と生活満足度の関係を分析しており、有配偶者女性における相対所得仮説の支持を示している。また、筒井 (2010) は、利他性、

1) 詳細については、次節以降を参照。

2) 大竹ほか (2010)。

競争心、儉約、信仰といった価値観や、喫煙、ギャンブルなどの行動と主観的幸福度との関係进行分析している。

これらの成果を元に、本分析では、ウェブ・アンケート調査によって収集したデータを用いて、行動と習慣が主観的幸福度に与える影響を分析する。あわせて、年収、教育年数、婚姻、子持ち、健康状態、生活環境、性格、年齢・性別、職業、地域ダミーをコントロール変数として導入する。

2. 主観的幸福度の規定要因

ここでは、本分析で扱う説明変数についてのサーベイを示すとともに、本分析で扱う変数について説明する。本分析で扱う説明変数は、生活習慣（喫煙、飲酒、ギャンブル、宝くじ、運動、外食）と行動（投票、ボランティア、募金・寄付、席を譲る）、社会人口学的要素（年収、教育年数、婚姻、子持ち、健康状態、生活環境、性格、年齢・性別、職業、地域ダミー）である。このうち、既に検討されてきた説明因について、以下で概観する。

2.1 生活習慣（喫煙、飲酒、ギャンブル、宝くじ、運動、外食）

筒井（2010）では、信仰、喫煙、飲酒、ギャンブルに関する習慣が取り上げられている。この分析では、信仰心が有意に正の相関を、喫煙が有意に負の相関を示している。Diener et al.（1991）も同様に、信仰心の高い人ほど幸福度が高くなるとしている。また、喫煙については、Veenhoven（2003）が同様の結果を得ている。しかし、この関係は自明ではなく、喫煙するから不幸になるのか、不幸だから喫煙するのか、それとも他に第三の要因があるのかはわからないと指摘されている（筒井，2010）。

飲酒に関しては、上記研究では有意な相関が得られていない。本分析では、飲酒頻度とともに、飲酒量を同時にたずね、その回答から一か月あたりの飲酒量を算出し、その値も説明因として推定に含めた。

運動と外食については、先行研究では扱われておらず、本分析で導入する説明因である。これらの習慣が、幸福度に与える影響は自明ではないが、運動は気分のリフレッシュをもたらせるかもしれないし、外食回数も何らかの影響を持ちうる。

2.2 行動（投票、ボランティア、募金・寄付、席を譲る）

投票については、たとえば、Frey and Stutzer（2000，2002）がスイスについて、民主主義による政治プロセスへの参加が幸福度に正の影響を与えることを示している。

また、ボランティア、募金・寄付、席を譲るといった行動は、利他性に対するプロキシとして位置づけている。利他性に関しては、Phelps（2001）がその関係を分析しているとともに、筒井（2010）は、「あなたが1000円を出すと9万9000円の補助が政府から出て、合計10万円があなたの親しい人の中で貧しい人に渡されます。あなたはこの1000円を出しますか」という問いへの回答と幸福度の関係を検討しており、有意に正の相関を得ている。この問いかけは仮想的であり、

「実際に負担する」となった場合には、表明された回答と不整合な対応が発生しうる。この点に対応するために、本分析では、ボランティアや募金・寄付、席を譲るといった行動を実際に行っているかどうかの頻度をたずねている。

2.3 年収

Easterlin (1974) の研究は、国単位に集計された幸福度指標と所得の関係に関するものである。多国間比較に関していうと、一般的に所得が上がれば幸福度も上がり、その上昇幅は逓減的である。また、Diener et al. (2002), Graham et al. (2004) は、所得と幸福度との正の相関を指摘している。しかしながら、Diener and Biswas-Diener(2002)は、両者が相関しないことを示している。また、Ferrer-i-Carbonell (2005), 浦河・松浦 (2007) らの研究は、相対所得仮説を支持している。すなわち、これらの研究によれば、自らの所得の絶対水準が幸福度に影響を与えるというよりは、自分の準拠集団 (Reference Group) における相対所得が幸福度に影響を与える。

2.4 教育年数

日本に関する研究については、浦河・松浦 (2007), 筒井 (2010) とともに、学歴が高いほど幸福度も高くなるという結果を得ている。他の要因をコントロールした上で、学歴が有意に相関を示すという結果は、教育が人々の主観的福祉の向上に直接的な影響を与えることを示唆する。本分析でも同様の結果が得られるならば、教育が幸福度に与える影響が、少なくとも日本においてはロバストなものであることが示されよう。

2.5 婚姻

Tsang et al. (2003), Frey (2008) などは、婚姻関係と幸福度との間に正の相関があることを示している。しかしながら、結婚が幸福度に与える正の影響は限定的であることを指摘するものもある。たとえば、色川 (1999), Lucas and Clark (2006) などの研究は、結婚が幸福度に与える影響は持続的なものではなく、数年から3-4年といった限りがあることを示している。

2.6 子持ち

子供の有無が幸福度に与える影響についてはさまざまな結果が存在している。たとえば、Tsang et al. (2003) は、中国のデータで、子持ちのSWBが下がるという結果を得ている。また、Kohler et al. (2005) は、デンマークのデータで、第一子誕生以降は子供が増えてもSWBは上がらないという結果を得ている。さらに、Somers (1993) は、意図的に子供を作らない夫婦が、逆の選択をする夫婦と同様に幸せと報告しており、Simon (2008) は、子持ち夫婦のほうが、そうでない場合よりも不安や憂鬱、感情的落ち込みを感じるとしている。

2.7 健康状態

Diener and Seligman (2004) のまとめでは、従来の研究は、五体満足などの身体的 (物理的)

健康に関するものが中心であり、うつ状態などの精神的健康をも含めるべきと指摘している。日本に関して、筒井（2010）は、健康状態と幸福度の有意に正の相関を示している。

2.8 生活環境

居住地の生活環境が、居住者の幸福度に影響を与えることを想像するのは難しくない。しかし、日本に関する先行研究の中で、生活環境と幸福度の関係を検討したものは数少ない。その理由の大きなものは、生活環境の水準をどのように測定するかという問題だろう。多くの場合、このような影響因は地域ダミーや都道府県ダミーによって処理する方法が採られている。

一方で、この生活環境の水準の評価として一例を挙げると、たとえば國光（2010）は、公共施設に関する住民の主観的評価を変数として取り上げている。本分析では、これにならい、居住地の生活環境に関する主観的評価をたずね、これをコントロールする。

2.9 性格

性格心理学の分野では、各個人の性格が5つの要素によって分類できるというビッグ・ファイブの議論がある（Tupes and Christal, 1961）。これによると、個人の性格は、高潮性、協調性、信頼性、情緒安定性、教養（文化）に分類される。Steel et al.（2008）は、この個人の性格が主観的幸福度に影響を与えることを示している。

2.10 年齢・性別

Graham et al.（2004）などにみられるように、多くの研究で、幸福度と年齢との間にはU字型の関係があるという結果が示されている。すなわち、一定の水準にまで年齢が増加するうちは、幸福度が下がる一方で、その閾値を超えると、加齢とともに幸福度は上がる。この点について、Blanchflower and Oswald（2007）は、OECD諸国で40代に変曲点が存在するとしている。一方で、筒井（2010）は、加齢に伴い幸福度は低下するとしている。

性別に関しては、男性よりも女性のほうが幸福度は高いということを示す研究は多数存在する。一方で、Inglehart（1990）、White（1992）などは性差が幸福度に与える影響はないとしている。また、筒井（2010）は、喫煙習慣をコントロールすると、性差の効果は消えるとしている。

2.11 その他の社会人口学的要素

残る要素は、職業と地域ダミーである。これらの変数の符号は自明ではないが、上記のコントロール変数で拾いきれない要素をこれらの変数で考慮する。

3. データと分析手法

3.1 データ

本分析で使用するのは、2012年1月に行ったウェブ・アンケート調査のデータである。調査対

象は、日本に居住する20代から60代までの男女で、サンプルサイズは3141である。実勢の男女人口比率、年齢別人口比率、都道府県別人口比率に合わせて各都道府県のデータを収集し、そのプール・データを使って分析を行った。以下に、分析で使用した変数とその質問票をまとめる。

3.1.1 主観的幸福度

この変数は、本分析における被説明変数である。具体的には「全体としてみても、あなたは現在、幸せですか。非常に幸せを10、非常に不幸せを0とすると、あなたの幸せ度は何点になりますか」という質問に対する回答である。

3.1.2 喫煙習慣³⁾

この変数は、「喫煙習慣についておたずねします」への回答であり、「1日21本以上」、「1日20本以下」、「1日10本以下」、「1日5本以下」、「恒常的には吸わない」、「まったく吸わない」の6つの選択肢の中から1つを選んでもらっている。この回答を順に6から1の離散変数にして使用している。

3.1.3 飲酒習慣

この変数は、「飲酒習慣についておたずねします」への回答であり、「ほぼ毎日飲む」、「週3日程度飲む」、「週2日程度飲む」、「週1日程度飲む」、「月2-3日程度飲む」、「月1日程度飲む」、「ほとんど飲まない」、「まったく飲まない」の8つの選択肢の中から1つを選んでもらっている。この回答を順に8から1の離散変数にして使用している。

3.1.4 飲酒量

この変数は「飲酒量についてお聞かせ下さい」への回答である。質問票では、回答しやすいように酒類を分類し、その杯数や本数をたずねている⁴⁾。そして、それぞれに含まれるアルコール量を計算し合算することで飲酒1回あたりの飲酒量が計算される。その量を、先にたずねた飲酒習慣での日数と乗算し、1月あたりの飲酒量として算出したものがこの変数である。

3.1.5 ギャンブル、宝くじ

この変数は、「パチンコや競馬、競輪などのギャンブル」の頻度、および「宝くじやサッカーくじなど」の購入頻度への回答であり、「ほぼ毎日」、「週1回程度」、「月1回程度」、「ほとんどし

3) 以下の質問が、分析における説明変数である。

4) 具体的には、ビール、カクテル500ml、日本酒（1合）180ml、ウイスキー・シングル30ml、ワイン（グラス1杯）100ml、焼酎（ロック）50mlを提示し、その杯数や本数をたずねている。

ない]、「まったくしない」の5つの選択肢の中から1つを選んでもらっている。この回答を順に5から1の離散変数にして使用している。

3.1.6 運動

この変数は、「週2回以上、かつ1日30分以上で、1年以上継続して運動をしていますか」への回答であり、「はい」を1、「いいえ」を0とするダミー変数である。

3.1.7 外食習慣

この変数は、「外食習慣についておたずねします。1週間の食事回数（1日3食であれば3回×7日＝21回）のうち、外食（調理済みの弁当や惣菜等を含む）が占める割合はどの程度ですか」への回答であり、「70%以上」、「70%未満」、「50%未満」、「30%未満」の4つの選択肢の中から1つを選んでもらっている。この回答を順に4から1の離散変数にして使用している。

3.1.8 投票、ボランティア、募金・寄付、席を譲る

これらの変数は、「選挙の際には、投票をしている」、「ボランティア活動に参加している」、「募金や寄付を行う」、「公共交通機関では、お年寄りや妊婦、体が不自由な人に席を譲る」といった行動に対する当てはまりを、「かなり当てはまる」、「当てはまる」、「やや当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「当てはまらない」、「まったく当てはまらない」の6つの選択肢の中から1つを選んでもらっている。この回答を順に6から1の離散変数にして使用している。

3.1.9 世帯年収

この変数は「税込世帯年収」をたずねている。「2000万円以上」、「2000万円未満」、「1500万円未満」、「1200万円未満」、「1000万円未満」、「900万円未満」、「800万円未満」、「700万円未満」、「600万円未満」、「500万円未満」、「400万円未満」、「300万円未満」、「200万円未満」、「100万円未満」の14の選択肢の中から1つを選んでもらっている。この回答を順に14から1の離散変数にして使用している。

3.1.10 相対年収

この変数は「相対年収」をたずねている。具体的には、「あなたが最終的に通った学校の同級生と比べて、現在のご自分の世帯の所得はどの程度だと思いますか」という質問への回答であり、「かなり高い」、「高い」、「やや高い」、「変わりない」、「やや低い」、「低い」、「かなり低い」の7つの選択肢の中から1つを選んでもらっている。この回答を順に7から1の離散変数にして使用している。

3.1.11 教育年数

この変数は「最終学歴」をたずねており、「大学院卒」、「4年制大学卒」、「高等専門学校卒」、

「短期大学卒」,「専門学校卒」,「高校卒」,「中学卒・その他」の7つの選択肢の中から1つを選んでもらっている。この回答を順に7から1の離散変数にして使用している。

3.1.12 婚姻

この変数は「婚姻関係」をたずねており、「既婚者」,「離婚者」,および「死別者」の3つのダミー変数を用意している。ダミーを割り振っていない未婚者が参照グループであり、各ダミー変数の係数は、未婚者と比べた差異を表す。

3.1.13 子持ち

この変数は「世帯に所属する子供の構成」をたずねており、子供の年齢を考慮する形でダミー処理を行った。具体的には、「未就学児」,「小学生」,「中学生」,「高校生」,「18歳以上」の5つのダミー変数を用意した。ダミーを割り振っていない子供を持たない人が参照グループであり、各ダミー変数の係数は、子供を持たない人と比べた差異を表す。

3.1.14 健康状態

この変数は「健康状態」をたずねており3つの質問を行っている。まず、「全体としてみて、あなたの現在の健康状態はいかがですか」という質問に対する自己申告として、「非常に良い」,「良い」,「まあ良い」,「あまり良くない」,「良くない」,「かなり良くない」の6つの選択肢の中から1つを選んでもらっている。この回答を順に6から1の離散変数にして使用している。

「睡眠時間」は、毎日の平均的な睡眠時間の絶対値をたずねたものである。

「精神的落ち込み」は「精神的な落ち込みや不安、憂うつを感じることはありませんか」という質問に対して、「よくある」,「ある」,「あまりない」,「まったくない」の4つの選択肢の中から1つを選んでもらっている。この回答を順に4から1の離散変数にして使用している。

3.1.15 居住地域の生活環境への満足度

この変数は、「居住地域の生活環境への満足度」をたずねており、4つの変数から構成される。具体的には、現在の居住地の「街並み」,「治安」,「生活の利便性」,「自然環境」に関する主観的評価を変数として取り上げた。このそれぞれに対して、「非常に良い」,「良い」,「まあ良い」,「あまり良くない」,「良くない」,「かなり良くない」の6つの選択肢の中から1つを選んでもらっている。この回答を順に6から1の離散変数にして使用している。

3.1.16 性格

この変数は、性格心理学で用いられているビッグ・ファイブとよばれる「性格尺度」である。ここでは、性格に関する44項目の質問を行い、それらを因子分析にかけて抽出された5つの因子を得点化し、性格尺度として用いている。ただし、「やや不注意だ」,「緊張しやすい」,「情緒が不安定になりやすい」,「あれこれ心配する」,「恥ずかしがり屋だ」,「気が散りやすい」から構成

される性格因子（情緒不安定，補論「性格因子（4）」）は，健康状態で扱っている「精神的落ち込み」と共線関係にあるため除外し，「信頼性」，「教養・文化」，「社交・外向性」，「非協調性」の4因子を変数として扱う。

3.1.17 年齢×性別

この変数は，「20代男性」，「30代男性」，「40代男性」，「50代男性」，「60代男性」，「20代女性」，「30代女性」，「40代女性」，「50代女性」，「60代女性」からなる年代と性別のクロス・ダミーである。分析では，「30代男性」が参照グループであり，各ダミー変数の係数は，「30代男性」と比べた差異を表す。

3.1.18 職業

この変数は，「会社員（管理職以外の正社員）」，「会社員（管理職）」，「会社役員・経営者」，「派遣・契約社員」，「公務員・非営利団体職員」，「教員・講師」，「医療専門職（医師，看護師，療法士など）」，「その他専門職（弁護士，会計士，税理士など）」，「農林漁業」，「自営業（農林漁業を除く）」，「パート・アルバイト・フリーター・内職」，「専業主婦・主夫」，「大学生，大学院生，専門学校生，短大生，予備校」，「無職，定年退職」の14の職種についてのダミー変数である。ここに登場しないその他の職業の人が参照グループであり，各ダミー変数の係数は，その他の職業の人との差異を表す。

3.1.19 地域

この変数は，「北海道」，「東北（青森，岩手，宮城，秋田，山形，福島）」，「関東（茨城，栃木，群馬，山梨）」，「京浜（埼玉，千葉，東京，神奈川）」，「北陸（新潟，富山，石川，福井）」，「東海（長野，岐阜，静岡，愛知，三重）」，「京阪神（滋賀，京都，大阪，兵庫，奈良，和歌山）」，「中国（鳥取，島根，岡山，広島，山口）」，「四国（徳島，香川，愛媛，高知）」，「九州・沖縄（福岡，佐賀，長崎，熊本，大分，宮崎，鹿児島，沖縄）」の10の地域についてのダミーである。「東海」を参照グループとし，各ダミー変数の係数は，東海地方との差異を表す。

3.2 分析手法

被説明変数が，離散変数であることを考慮し，以下の順序ロジスティック回帰モデルにより分析を行う。

$$y = \begin{cases} 0 & (\text{if } -\infty \leq y^* = \beta'X + \varepsilon \leq \kappa_0) \text{ w. p. } \Pr[y=0] = F(\kappa_0 - \beta'X) \\ n & (\text{if } \kappa_{n-1} \leq y^* = \beta'X + \varepsilon \leq \kappa_n \text{ w. p. } \Pr[y=n] = F(\kappa_n - \beta'X) - F(\kappa_{n-1} - \beta'X) \\ N & (\text{if } \kappa_{N-1} \leq y^* = \beta'X + \varepsilon \leq \infty \text{ w. p. } \Pr[y=N] = 1 - F(\kappa_{N-1} - \beta'X) \end{cases}$$

where $n = 0, \dots, 10$.

$$\beta'X = \sum_i a_i \times \text{variable}_i,$$

$$F(z) = \frac{\exp(z)}{1 + \exp(z)}.$$

ここで、 y は主観的幸福度、 y^* は主観的幸福度の高低を表すスコア変数、 β は係数ベクトル、 X は説明変数ベクトル、 ε は誤差項、 $\Pr[y = n]$ は被説明変数である y が n をとる確率、 $F(\cdot)$ はロジスティック関数の累積確率密度、 κ_n はスコア変数の n 番目の閾値である。

4. 推定結果

ここでは、推定結果を報告する。

4.1 行動・習慣

まず「喫煙習慣」については、有意に負の相関が得られた。この結果は筒井（2010）と整合的である。また、「飲酒習慣」については有意に正の相関が得られたが、「（一か月の）飲酒量」とは有意に負の相関が得られた。筒井（2010）の順序プロビットの結果では飲酒は有意な結果を示していない。そこでの質問は、「ほぼ毎日缶ビール（350ml）にして5本以上」、「ほぼ毎日缶ビール（350ml）にして3本程度」、「ほぼ毎日缶ビール（350ml）にして1本程度」、「ときどき飲む」、「ほとんど飲まない」、「まったく飲まない」の順序になっている。本分析では、飲酒頻度と飲酒量を分けて説明変数に組み込んだため、このような相違が生じているのかもしれない。また、Veenhoven（2003）は、飲酒と幸福度との関係は明確でないとしているため、この点に関しては、分析の蓄積が必要であろう。

パチンコや競馬、競輪などの「ギャンブル」については有意な相関が得られなかったが、宝くじやサッカーくじの購入頻度に関しては有意に負の相関が得られた。筒井（2010）では、ギャンブルという1つの変数のなかに、宝くじ、サッカーくじ、競馬、競輪、パチンコといった要素が含まれている。本分析では、これを、「パチンコ・競馬・競輪」と「宝くじ・サッカーくじ」の2つに分けて分析を行っている。

ここで、この2組のギャンブルについて本質的な違いがあるのかどうかは自明ではないが、くじはほぼ何らかのくじが毎日販売されており、かつくじ売り場のみならずATMやコンビニエンスストアの通信端末などで簡単に購入できる一方、パチンコや競馬・競輪は、アクセスの面でくじよりも敷居が高いことが何らかの影響を与えているのかもしれない。

「運動」については有意な相関が得られなかった。恒常的に運動をしている人は、気分のリフレッシュやストレスの発散といった面で、幸福度に正の影響を与えるのではないかと思われていたが、ここではその予測は当てはまらなかった。もしかすると、運動習慣に関する質問の「週2回」や「1回30分以上」、「1年以上継続」かつ「当てはまる」か「当てはまらない」かの二択といった条件

表1 被説明変数：主観的幸福度の推定結果

説明変数	係数	z	p
喫煙習慣	-0.122	-4.14***	0.000
飲酒習慣	0.008	2.04**	0.041
飲酒量	-0.001	-1.67*	0.095
ギャンブル	0.000	0.03	0.979
宝くじ	-0.054	-1.96**	0.050
運動	0.014	0.18	0.857
外食習慣	-0.036	-0.64	0.519
投票	0.051	1.89*	0.059
ボランティア	-0.020	-0.65	0.513
募金・寄付	0.078	2.13**	0.033
席を譲る	0.065	1.72*	0.085
世帯年収	0.023	1.66*	0.097
相対年収	0.021	6.59***	0.000
教育年数	0.059	3.05***	0.002
既婚	0.854	7.08***	0.000
離婚	0.241	1.49	0.137
死別	0.004	0.02	0.986
未就学児	-0.057	-0.42	0.678
小学生	0.100	0.82	0.414
中学生	0.031	0.19	0.849
高校生	0.051	0.34	0.737
18歳以上	-0.020	-0.18	0.861
子供なし		Ref.	
自己申告健康状態	0.351	7.99***	0.000
睡眠時間	0.136	4.02***	0.000
精神的落ち込み	-0.686	-13.58***	0.000
街並み評価	0.027	0.51	0.609
治安評価	0.058	1.07	0.284
生活利便性評価	0.139	3.83***	0.000
自然環境評価	0.113	2.73***	0.006
性格因子(1)	0.080	1.88*	0.060
性格因子(2)	0.055	1.27	0.204
性格因子(3)	0.280	6.09***	0.000
性格因子(5)	-0.167	-3.74***	0.000
20代男性	0.325	2.02**	0.043
30代男性		Ref.	
40代男性	0.165	1.12	0.262
50代男性	0.153	0.86	0.388
60代男性	0.094	0.50	0.616
20代女性	0.861	4.85***	0.000
30代女性	0.384	2.42**	0.015
40代女性	0.404	2.35**	0.019

行動や習慣が主観的幸福度に与える影響

50代女性	0.382	2.09**	0.037
60代女性	0.158	0.83	0.405
正社員	-0.076	-0.32	0.749
管理職	-0.186	-0.68	0.495
役員・経営者	0.111	0.34	0.732
派遣・契約社員	-0.052	-0.18	0.854
公務員・非営利団体	0.079	0.28	0.776
教員・講師	0.066	0.21	0.832
医療専門職	0.142	0.46	0.647
その他専門職	-0.270	-0.57	0.570
農林漁業	-0.189	-0.36	0.716
自営業	-0.059	-0.22	0.824
パート・フリーター	-0.259	-1.04	0.299
専業主婦・主夫	0.105	0.41	0.680
学生	0.521	1.70*	0.089
無職・定年退職	0.001	0.00	0.998
その他職業		Ref.	
北海道	0.035	0.21	0.837
東北	-0.309	-1.97**	0.049
関東	-0.298	-1.80*	0.073
京浜/一都3県	-0.076	-0.66	0.509
北陸	-0.099	-0.65	0.514
東海		Ref.	
京阪神	-0.018	-0.14	0.887
中国	-0.100	-0.63	0.531
四国	-0.379	-1.96**	0.050
九州・沖縄	-0.124	-0.89	0.373
疑似決定係数		0.1156	
観察数		3141	

注：*** $p<0.01$, ** $p<0.05$, * $p<0.10$. 不均一分散一致標準誤差を採用. 性格因子については補論を参照. なお, 性格因子(4)は, 精神的落ち込みと共線関係にあるので落として推定している. Ref. は参照属性である.

が厳しすぎたのかも知れず, もう少し幅を持った質問の仕方を検討すべきであるかもしれない。

「外食」についても有意な相関が得られなかった。ここでは, 食事の形態(外食, 惣菜, 弁当など)だけを問題にしているが, そのことが幸福度へ与える影響は確認できなかった。「孤食」や「家庭の温もり」の欠如といった問題が, しばしば議論的となるが, これらが幸福度に影響を与えるのか, 与えないのかといった点については, さらに詳細な分析が必要である。

「投票」, 「募金・寄付」, 「席を譲る」といった行動は有意に正の相関を示している。「投票」に関しては, Frey and Stutzer (2002) の結果と整合的である。また「募金・寄付」, 「席を譲る」に関しては「利他性」のプロキシであると冒頭で説明した。ここでの結果は, 先行研究と整合的である。ただし, これは「喫煙」と「幸福度」の関係で指摘されたように, 利他的な行動を取るか

ら幸せなのか、幸せだから利他的な行動を取るのかの因果関係は自明ではない点に注意が必要である。また「ボランティア」に関しては、有意ではないがその符号は、マイナスとなっている。想像の域をでないが、今回用いたデータは、2011年3月に起きた東日本大震災および福島第一原子力発電所での事故から1年経たずして実施されている。この間、震災関連のボランティアに参加した人が回答者に含まれている可能性もあり、それらの影響があったかもしれない。

4.2 社会人口学的要素

「世帯収入」と「相対収入」については、いずれも有意に正の相関を示している。すなわち、所得の絶対水準が幸福度に影響を与える一方で、自らが属する準拠集団の所得との相対関係についての主観的評価も幸福度に影響を与えることが示された。すなわち、ここでの結果は相対所得仮説を支持している。

「教育年数」は、有意に正の相関を示している。すなわち、教育水準が高い人ほど幸福度・生活満足度は高いことが示された。この結果も先行研究と整合的である。

「既婚ダミー」は有意に正の相関を示している。すなわち、既婚者の幸福度・生活満足度はそうでない人よりも高い。一方で、離婚・死別のダミーはいずれも有意でない。ここでの結果も先行研究と整合的である。

「子持ち」が主観的幸福に与える影響については、有意な結果が示されなかった。先行研究の結果も、子供を持つことが幸福度に与える影響については、社会や文化圏の違いなどによりさまざまであり、普遍的なことが示されているわけではない。

「自己申告健康状態」は、有意に正の相関を示している。すなわち、自らの健康状態が良いと評価している人の幸福度・生活満足度は、そうでない人よりも高い。また、「睡眠時間」も有意に正の相関を示しており、睡眠時間が長い人の幸福度・生活満足度は高いことが示された（平均は約6.5時間）。さらに、「精神的な落ち込み」を感じるかどうかに関する自己申告は、有意に負の相関を示しており、不安や憂鬱を感じる頻度の高い人の幸福度は下がる傾向にあることが示された。

居住地の生活環境に関しては、「生活利便性」と「自然環境」が有意に正の相関を示しているが、「街並み」と「治安」については、符号はプラスであるが、有意な相関を得ることはできなかった。ここでの結果は、限定的ではあるが、居住地域の生活環境が、幸福度に正の影響を与えることが示唆している。

性格尺度については、「信頼性（性格因子1）」、「社交・外向性（性格因子3）」が有意に正の相関を、「非協調性（性格因子5）」が有意に負の相関を示している。ここでの結果は、「責任感があり、念入りで、最後までやり遂げることができる人」や「明るく、人と接するのを好む人」の幸福度が高いことを示している。

年齢と性別に関しては、「30代男性」を参照グループとしたとき、女性は60代を除く全ての年代で有意に正の相関を示している。また、男性に関しては20代で有意に正の相関がみられている。

職業に関しては、ここでは「学生ダミー」のみが有意に正の相関を示している。ここでいう学

生は「20歳以上の学生を指す」。社会に出る前段階で、さまざまな自由な選択権が増し、一般的な社会人と比べて自由度が高いことを反映しているためであろうか。

地域ダミーについては、東北ダミーと関東ダミー、四国ダミーが有意に負の相関を示している。四国ダミーが負の相関を示している原因は不明でないが、東北・関東ダミーの負の相関は、おそらく、2011年3月の東日本大震災が影響していると考えられる。当該地域は、地震と津波による被害が発生するとともに、東京電力福島第一原子力発電所での事故の影響を受けている地域である。この分析だけで断定はできないが、この災害が当該地域の人々の幸福度に影響を及ぼしたであろうことは想像に難くない。

5. まとめ

本分析では、既存研究の成果をもとに、行動や習慣と主観的幸福度との関係を統計学的に検討した。以上の節で示されたように、ここでの結果は、ある特定の行動や習慣と幸福度との間に有意な相関があることを示している。また、婚姻や年齢、性別といった社会人口学的属性も幸福度への影響因であることが統計学的に示されている。

人々の感じる幸せや満足がどのような要因によって決定されるのかといった問いは、ある意味においては哲学的であり、それ自体が学問の対象として興味深い。このことは、心理学などの分野で当該分野の多くの研究が行われてきたことからして確かであろう。

また、福祉水準の適切な測定のあり方について多面的に検討したStiglitz et al. (2009)で示されたように、個人の福祉水準(Well-being)の評価は、所得や教育水準といった客観的要素のみならず、喜びや楽しみ、痛みや悲しみといった主観的側面も含まれるべきである。その意味において、幸福度研究は、人々の福祉水準の評価の分野において重要な役割を期待されていると聞いていいだろう。

さらに、政策担当者にとっても有益な情報を提供しうる。たとえば、健康状態や教育水準といった客観的条件が幸福度にプラスの影響を与える場合には、健康増進や教育水準向上のための政策プログラムを推進することで、人々の幸福度を向上させることができるという政策的インプリケーションを導きうる。また、本研究で扱った住民の居住地環境への満足度といった情報も、生活利便性や自然環境の改善といったプログラムに対する一定の根拠を示すものであり得る⁵⁾。

いっぽうで、幸福度研究の成果を政策論に落とし込む際には一定の留意が必要であるように思われる。たとえば、幸福度研究で扱っている変数の多くは、客観的・定量的に評価できない定性的な離散変数であり、ある変数の影響のインパクトを定量的に評価するのは極めて難しい。すなわち、公共事業等で行われる費用便益分析の適用は不可能であり、定性的な情報に基づいた政策根拠しか提示できない。また、たとえば、居住地環境への主観評価が幸福度に影響するように、個人の価値観がそのひとの主観的幸福度に影響を与えることは間違いないようである。さらには、

5) 本分析もそうであるが、もちろん、居住地環境に対する住民の満足度は、各住民の「主観的評価」である。

補表 性格因子の因子負荷量

変数	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
完璧に仕事をする	0.655				
他人に親切だ	0.432				
信頼できる労働者だ	0.643				
頭がよい	0.475				
熱意にあふれている	0.516				
信用できる	0.657				
怠けがちだ	-0.434				
最後までやり遂げる	0.664				
思慮深く親切だ	0.510				
効率的に物事に対処	0.588				
計画をとおり実行する	0.582				
新しいアイデアを出す		0.626			
想像力が豊か		0.576			
独創的だ		0.697			
美的経験に価値をおく		0.635			
好んでアイデアを出す		0.658			
美術センスがある		0.627			
話好きだ			0.675		
元気がない			-0.528		
控え目だ			-0.597		
元気いっぱいだ			0.575		
静かだ			-0.646		
社交的だ			0.631		
やや不注意だ				0.454	
緊張しやすい				0.638	
情緒が不安定				0.547	
あれこれ心配する				0.620	
恥ずかしがり屋だ				0.500	
気が散りやすい				0.534	
他人のあら探しをする					0.492
他人と口論する					0.610
攻撃的だ					0.680
お高くとまっている					0.540
他人に失礼だ					0.521

本分析でも扱っている個人の性格も、そのひとの幸福度に影響を与えている。しかし、これらの要素は政策論の対象となりえない。したがって、幸福度研究の成果を実際の政策に活用しようとするならば、上記を含めさまざまな点を考慮しなければならない。

幸福度研究の意義は、本節冒頭のとおりであり、そこで得られた知見をどのように取り扱うのかと、また取り扱いうるのかという点が、今後の課題であろう。

補論 性格因子の抽出

調査では、性格に関する44の質問を行った。その回答を主因子法による因子分析にかけ、単純構造が得られるように、変数の数を34まで落とした。バリマックス法によって、因子軸を直交回転させたのち、それぞれの因子得点を計算し、コントロール変数として分析に用いた。ここで、因子1を「信頼性」、因子2を「教養・文化」、因子3を「社交・外向性」、因子4を「情緒不安」、因子5を「非協調性」とした。ここでの性格因子の分類は、Tupes and Christal (1961)らのものと同様である。

参考文献

- Blanchflower DG, Oswald AJ (2005) Happiness and Human Development Index: The Paradox of Australia. NBER Working Paper, No. 11416
- Bok D (2010) The Politics of Happiness: What Government Can Learn from the New Research on Well-Being. Princeton University Press, Princeton. (デレック・ボック (2011) 『幸福の研究』土屋直樹ほか訳東洋経済新報社)
- Diener E, Nickerson C, Lucas RE, Sandvik E (2002) Dispositional affect and job outcomes. *Social Indicators Research* 59: 229-259
- Diener E, Biswas-Diener R (2002) Will Money Increase Subjective Well-being? A literature review and guide to needed research. *Social Indicators Research* 57: 119-169
- Diener E, Seligman MEP (2004) Beyond Money: Toward an Economy of Well-being. *Psychological Science in the Public Interest* 5: 1-31
- Diener E, Suh EM, Lucas RE, Smith HE (1999) Subjective Well-Being: Three Decades of Progress. *Psychological Bulletin* 125: 276-302.
- Dolan P, Peasgood T, White M (2008) Do we really know what makes us happy? A review of the economic literature on the factors associated with subjective well-being. *Journal of Economic Psychology* 29: 94-122
- Easterlin R (1974) Does Economic Growth Improve the Human Lot? Some Empirical Evidence. In: David PA, Reder MW (eds) *Nations and Households in Economic Growth: Essays in Honor of Moses Abramovitz*, Academic Press, New York and London, pp 89-125
- Ferrer-i-Carbonell A (2005) Income and Well-being: An Empirical Analysis of the Comparison Income Effect. *Journal of Public Economics* 89: 997-1019
- Frey BS, Stutzer A (2000) Happiness Prospers in Democracy. *Journal of Happiness Studies* 1: 79-102.

- Frey BS Stutzer A (2002) *Happiness and Economics*, Princeton University Press, Princeton. (佐和隆光監訳, 沢崎冬日訳 (2005) 『幸福の政治経済学—人々の幸せを促進するものは何か』ダイヤモンド社)
- Frey BS (2008) *Happiness: A Revolution in Economics*. The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, London
- Graham S, Eggers A, Sukhtankar S (2004) Does Happiness Pay? An Exploration Based on Panel Data from Russia. *Journal of Economic Behavior and Organization* 55: 319–342
- Inglehart R (1990) *Culture Shift in Advanced Industrial Society*. Princeton University Press, Princeton
- Kohler H-P, Behrman JR, Skytthe A (2005) Partner + Children = Happiness? The Effects of Partnership and Fertility on Well-Being. *Population and Development Review* 31: 407–445
- Lucas RE, Clark AE (2006) Do people really adapt to marriage? *Journal of Happiness Studies* 7: 405–426
- Phelps CD (2001) A Clue to the Paradox of Happiness. *Journal of Economic Behavior and Organization* 45: 293–300
- Simon R (2008) The Joys of Parenthood Reconsidered. *Contexts* 7: 40–45
- Somers MD (1993) A Comparison of Voluntarily Child-Free Adults and Parents. *Journal of Marriage and the Family* 55: 643–650
- Steel P, Schmidt J, Shultz J (2008) Refining the relationship between personality and subjective well-being. *Psychological Bulletin* 134: 138–161
- Stiglitz E, Sen A, Fitoussi J-P (2009) Report by the Commission on the Measurement of Economic Performance and Social Progress (<http://www.stiglitz-sen-fitoussi.fr>) (最終閲覧日 2012年10月30日)
- Tsang L, Harvey C, Duncan K, Sommer R (2003) The Effects of Children, Dual Earner Status, Sex Role Traditionalism, and Marital Structure on Marital Happiness Over Time. *Journal of Family and Economic Issues* 24: 5–26
- Tupes EC, Christal RE (1961) Recurrent Personality Factors Based on Trait Ratings. Technical Report ASD-TR-61-97, Lackland Air Force Base, TX: Personnel Laboratory, Air Force Systems Command
- Veenhoven R (2003) Hedonism and Happiness. *Journal of Happiness Studies* 4: 437–457
- White L (1992) Marital Status and Well-being in Canada. *Journal of Family Issues* 13: 390–409
- 色川卓男 (1999) 「結婚・出産・離婚での女性の〈生活満足度〉はどう変わるか」樋口美雄・岩田正美編『パネルデータからみた現代女性』東洋経済新報社 193–223
- 浦川邦夫・松浦司 (2007) 「相対的格差が生活満足度に与える影響—消費生活に関するパネル調査による分析」『季刊家計経済研究』第73号 61–70
- 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎 (2010) 『日本の幸福度 格差・労働・家族』日本評論社
- 國光洋二 (2010) 「住民生活満足度の地域間格差に影響する要因—山形と山口の市町村データによる共分散構造分析—」『地域学研究』第40巻 129–141
- 筒井義郎 (2010) 「なぜあなたは不幸なのか」大竹ほか編著『日本の幸福度 格差・労働・家族』日本評論社 33–73
- 白石賢・白石小百合 (2010) 「幸福の経済学の現状と課題」大竹ほか編著『日本の幸福度 格差・労働・家族』日本評論社 9–32